絵本のよみきかせによる
幼児の指導

水　野　美　恵
佐　藤　利佳子
片　山　真　澄

Ⅰ．なぜよみきかせを？

「近ごろの子どもはファミコンにＴＶ、そしてまん画本にあけくれている。」という通説を聞きながら、子どもたちはそれに満足しているのだろうか、そんな生活に満足していていいのだろうか、という問いを私たちは私たち自身に投げかけてみたい。

私たちが幼かったころ、母親に読んでもらった何冊かの本、祖母から聞いたむかしむかしの話、折にふれて担任の先生が読んでくれた本、そんなお話のいくつかが今でも心のすみに残っています。こうして今、教師として幼い子どもたちの前に立って、絵本を読みきかせているのはあの心地よい思い出が、私たちをかりたてているからのような気がします。

子どもたちは、本を読んでもらうことは大好きで、そこから拡がる世界にひきこまれ、心をおどらせ、遊びにひたりこんでいくのだということを知りました。よみきかせのあとすぐ示される反応があるかと思えば、ずい分時間がたってからポツン・ポツンと表れてくるものもあります。

一冊の本のよみきかせから、子どもの創造的な遊びや生活がどんなふうにきり拓かれていっているのだろうか？　絵本からイメージをふくらませ遊びを創造していく子どもたちを見て、もっともっと豊かなイメージ作りの手助けをしてやることはできないだろうか？　そして、子どもたちが絵本を見・聞きして、未知の世界を空想しイメージをふくらませて遊びを創っていくために私たちは何ができるだろうか？

こんなことを自らに問いかけながら、本と出会う時の〝きっかけ〟や、〝いい出会い〟を作ることができるのは、この幼児期が最もよい時期ではないかと考えました。

幼い子どもの場合、本の好きな大人がそばにいて、その子の興味ありそうな世界や興味のある世界と関連のある本を与え、よみきかせることが子どもが本の世界に入っていくために一番自然なやり方であるような気がします。

II．よみきかせへの願い

石井桃子著「子どもの図書館」の中で、

〝子どもが本（文字）の世界に入って得る利益は大きく分けて二つあります。一つはそこから得たものの考え方によって、将来複雑な社会でりっぱに生きてゆかれるようになること、それからもう一つは、育ってゆくそれぞれの段階で心の中でたのしい世界を経験しながら大きくなってゆかれることです。〟

と述べています。

「心の中で、たのしい世界を経験すること」こそ今の科学・機械の時代に生まれ育っている子どもたち（これウソの話でしょ？こんなことありっこないよ！とひらき直る子どもたち）にとって、心豊かに人間らしく育っていくために大切なことです。

それを絵本のよみきかせと結びつけて考えていこうと試みてみました。その中で、私たちは子どもたちに願うことがはっきりしてきました。

○絵本にもっともっと親しみを持って子どもたちから積極的に絵本にふれあってほしい。

○本の内容を自分の中にうけとめ共感・同化できる豊かな心を持ってほしい。

○本の内容をもとに、そこから創造し・遊び、自分の空間を広げていってほしい。

○創造力の豊かな子どもになってほしい。

○落ち着いて本が聞ける子であってほしい。（耳と目と心と身体中で聞いてほしい。）

○言葉の使い方・話し方を知ってほしい。

○理屈ではなく無条件に楽しいと感じてほしい。

○その子なりに絵本の世界にひたってほしい。

○絵本の世界にひたっている子どもに共感できる教師になりたい。

○絵本の世界を自分の現実の生活にとり入れていくエネルギーをもった子どもに育ってほしい。

こんなにもたくさんの願いが私たちの毎日の保育の中にふつふつと湧いてきました。そして、その願いを持って、保育にとりくもうと様々な活動をとり入れてきました。

Ⅲ．絵本との出会いから　…５才児

〝先生、この本読んで〟

〝プロントザウルスって知ってる〟

① 胸をはって登園してほしいＡ君　（４月）

―〝おはよう〟と元気に挨拶してほしい。―

ひとりでブロックや粘土で遊んでいる事が多く、友だちと話したり、遊ぶところを見かけるのが少ないＡ君。朝もうつむき加減で登園し、だらりだらりと教室に向かう。教師に「おはよう。」と声をかけられても、口の中でボソッと返すのみ。そんなＡ君は、大の恐竜好き。いつも恐竜の図鑑を見ては悦に入っている。恐竜に関しては、どの子よりも知識が豊かで、自信を持っているようだ。とかく私たちは、Ａ君のように、ひとりでぽつんと遊び、嬉しいのか、つまらないのか表情に出さない子、それでいて教師の手をわずらわしたり、困らせたりしない子どもを、消極的でおとなしい子、と見がちである。しかし、そのような子でも、何かに意欲を示し、積極的に自己主張する場があるはずで、その糸口を見つけてやることが、私たち教師の仕事かもしれない。こんな気持ちで、Ａ君と恐竜（絵本）とのかかわりを見ていきたい。

㋐絵本や図鑑とともに（５月）

〝キャンプしたいな〟

〝これ、プロントザウルスだよ〟

１．〝あーあ、ほんとにキャンプしたいなあ〟

「はじめてのキャンプ」林明子　作・絵　の読みきかせの後、クラスの中で、キャンプをしたいという声が次々に出、つりをしよう、おばけごっこをしよう、虫とりをしよう、裏山にテントみたいなお家を作ろう、とそれぞれが思い思いの事を話してい

た。そんな時Aは、話には入ってこなかったが、いつも近くで、「きょうりゅうたち」の本を見ては、粘土で恐竜を作っていた。

2．B君といっしょに本を見たA

「はじめてであうずかん(さかな)」を、あまり接したことのないBたちと見るA。しばらく黙っていたAが、Bのつりの話や魚の話が出て来ると突然、「ぼくね、水族館へ行ってねー、ねーねーねー先生！ぼく水族館へ行ったら、ウーパールーパーいた。」ときりだし、自分が見た魚について話し始めた。Aは意外にも恐竜だけではなく、魚にも興味がある事、Bと少しづつかかわっていく様子を見る事ができた。

3．トリケラトプスだ！両生類の図鑑を見て

図鑑を見る事を楽しみに登園するA。「両生類」の本を友だちと一緒に囲み、恐竜のトリケラトプスに似た両生類をみつける。犬か恐竜しか倒せない赤かぶとの事をBから話しかけられ、目を輝かせて質問するAだった。

4．恐竜だよ。他の先生にも見せたいな！

今まで、ほとんど一人で粘土遊びをしていたAが、「きょうりゅうたち」の本を見ながら、友だちと一緒に恐竜を作り始めた。担任に自分から「かっこいい？」と見せ、「他の先生にも見せたいな。呼んで来て。」自分の気持ちを伝える事ができた。皆からほめられたAは、得意になって恐竜について話してくれた。

㋑魚つりごっこしよう（6月）

—魚を作るA—

キャンプをしたいという話がもち上ってから、Bを中心に「魚つりごっこをしよう。」という動きが出てきた。どんな魚つりをするのか話し合った末、魚の絵を描き、クリップをつけてじしゃくでつる事になった。描く事の苦手なAは、最初抵抗があったが、友だちの魚が次々とでき上るのを見て、図鑑を見ながらサメを描き始め、最後には、クラス一大きなサメを作った。皆から「A君のすごいなあ。」と言われて嬉しそうなA。遊戯室を川原にし、川や橋、滝等を作る時は、積極的に積木を運んだり、枯木を作った。でき上った場所で、AとIで始めた〝サメ鬼ごっこ〟をみんなでルールを決めながらやって遊んだ。その時のAの機敏な動きに驚ろかされた。

㋒魚つりに行こう（6月）

じしゃくのついたつりざおをかついで川原へでかける子どもたち。つった魚を嬉しそうにグループの仲間と焼いて食べるA。魚がぐんぐんつれたAは「おれはつりの名人だ。」と大声をあげた。

㋓ぼくも仲間に入れて（7月）
——夢中でままごと遊びをする友だちにひきこまれて——

「はじめてのキャンプ」の読みきかせの後、食事作りのようなままごとしたい、お家を作って、その中でお母さんごっこしたい、という声が上った。男の子は、ままごとと言うと乗り気にならないので、「裏山へ行って、好きなことしよう。」と気楽に誘い出した。虫とりの好きなBたちは、時期的に早く虫が見つからず、あきらめて川の近くに集まって来た。そこで女の子たちが、川の水を汲んで来て、土と混ぜてチョコレートやコーヒー等を作って遊んでいた。それを見て男の子も次々と泥んこ遊びをやり出し、お母さんごっこのような役割を持った遊びにも入っていった。

1．〝おーい、水汲んで来たぞー。〟

翌日、空ビン、空容器等を持って登園してくる子が何人もいた。昨日は虫とりだけに執着していたBの「先生、早く山へ行って昨日の続きやろう。」という催促で、空容器を持って裏山へ向かう。Aは、Iたちのそばで穴を掘って水を入れる遊びを始める。水の量、土の性質、混ぜ方、練り方、色のちがい等、男の子たちは、本気でとりくみ、偶然にできた意外な結果に目を見はり、また更に試みていった。「水屋！水、いりませんか。」「チョコレート屋でーす。甘いよ。」いつの間にか走り回ったり呼びかけが始まる。「○○ください。」「ありがとう。」の声がとびかう。Aも川から水を汲み、「おーい、水汲んで来たぞ！」と友だちに水を分けたり、Iたちに「仲間に入れて。」声をかけアイスクリーム屋になって満足顔で遊び込んでいた。

2．〝ぼく、トカゲのしっぽさわれるよ。
強くやるなよ。— 言動に自信が出てきたA

男の子たちは、再びBを中心に山の草むらに虫さがしに出かけた。女の子たちは、続きのままごとやレストランごっこをしている。Iにトカゲをもらう A、ヘビをつかまえるB。ヘビの名前を調べようとAやBを中心に「両生類」の図鑑を囲む事40分。

山への探検では、得意になって友だちにトカゲを見せるAだった。

㋔おばけの話、してよ！（7月）
〝めっきらもっきらどおんどおん〟読んで！とA

ままごとや、虫とりに夢中になっている間も、「先生、おばけの話してよ。」「おばけごっこしようよ。」という声が絶えなかった。「はじめてのキャンプ」のお話で、夜テントの中で泣きたいのをがまんして怪談を聞いていた、なおこの姿が印象深かったらしい。

1．めっきらもっきらどおんどおん

おばけの話を催促する子が多くなった時、Aが「この本読んで。」と持って来た本である。読み終えると、おばけを描いて、おばけの国づくりが始まった。

2．〝おばけの話をして〟

毎日、「おばけの話して。」「おばけの本読んで。」と催促され、何冊も読んであげた。時には、遊戯室で暗幕をひき、ローソクの灯を囲んで話した事もあり、Aも今までにない大声をワーと出して逃げ回っていた。

3．〝ぼくたちがおばけになりたい〟

「先生、鬼作ろうよ。おれ夜もねないで考えた。ゴムつけてホネホネロック…。」Tの言葉に他の子も「ぼくたちがおばけになりたい！」と張り切り出し、家から材料を持って来た。Aは、紙いっぱいにおばけの顔をすらすらっと描き、「できたぞ！はい！」と担任に渡し、教室を出て行ったが、他の子が作り終わるころ、再び一つ目おばけの製作にとりかかった。

4．おばけ屋敷を作ろう

自分たちがおばけに扮すると、おばけの出てくる背景を、積木、とび箱等を使って遊戯室いっぱいに作っていった。次には、年少や年中を驚かそうという事になり、おばけ屋敷（おはか）に招待する事になった。自分のお面や衣裳をまとい、たいこの音に合わせ、隠れ場からそろりそろりと出て来る子。昨日かぜで休んだAも、気おくれせずにおばけ屋敷に出かけて行った。年少は入口から一歩も入れない。年中の逃げ回る子を見て、「やったー。」と大満足の子どもたちだった。

㋕山へ行くぞー　くわちゃんとるぞー！

―先頭に立って出かけるA―

夏休みが終わり、前にはとれなかったバッタやこおろぎの時期になった。一学期に虫とりに満足しなかったAやBは、張り切って出かけて行った。「くわちゃんとるぞー。」と大きな声を上げたA。Aは、木の皮をはいだり木をゆさぶり、くわがたを1匹とる。自信たっぷりに、「先生！見たか！ぼくのくわがた。」「おい、T、オレのくわがた、袋破って出てきたぞ！」今まで、めったにオレという呼び方をしなかったA。友だちや先生にも、はっきりと張るのある声で、自分の気持ちを伝える事ができた。その後、毎日裏山へ友だちを誘って出かけるAである。

② Aの心に何が育ってきただろうか

1．言動に自信が現われ、堂々と胸をはって行動したり、自分の意思を相手にはっきりと伝えられるようになった。又何よりも、朝の挨拶を自分からするようになり、気楽に友だちや教師に話しかけたり、おしゃべりを楽しむようになった。

2．図鑑を媒介に友だちができ、一緒に見たり、皆で粘土で遊ぶようになった。また、静的な遊びだけでなく、サメ鬼ごっこのような運動的な遊びも好むようになり、体をいっぱいに動かして遊ぶ様になった。友だちとかかわりながら、周囲の子の様子にも目が行くようになった。

3．絵画製作が苦手で、初めから「できない。」とうなだれる事が多かった以前に比べ、魚づくりやおばけ作りでは、友だちの様子を見ながらも、まねする事なく、自分なりに工夫して作り上げる事ができた。頑張って挑戦する姿が見られるようになってきた。

4．以前は、欠席した翌日は、園生活のリズムにもどるのに時間がかかったが、この頃は、すぐに活動や友だちの中に入る事ができるようになった。

5．しかし、まだ新しい事にぶつかると、少々のとまどいを見せるAである。

③ Aから学んだこと

1 子どものつぶやきや行動を、ゆったりとした気持ちで聞いたり、見てあげる事の大切さを知った。

――Aとじっくりつき合う中で、「Aはどうしてそんな行動をとったのだろうか。」「どんな気持ちから出た言葉だろうか。」と子どもの内面にも目が行くようになった。すると、どんな小さな動きや、つぶやきも教師への大切な信号である事に気がついた。

2 子どもと本気でつき合う事の大切さを知った。

――Aを全て受け入れ、認め、本気でつきあい、Aと同じ体験をする事から芽ばえた共感や信頼が、Aの心を解放させたのだろう。子どもは、自分と同じ気持ちになってくれる教師を望んでいるのだ。

3 子どもから聞き出すのではなく、聞いてあげる事の大切さを知った。

――教師に受け入れられるうちに、自分自身に自信がつき、次への活動の大きなエネルギーになっていった。

4 ひとりの子どもをよくすることは、クラス全体をよくする事につながっていた

――これらの活動を通し、Aがよりよくなると同時に、クラスの子どもたちが、自分に自信を持ち、お互いのよさを認め合いながら、何かにむかい、やりとげていく姿勢が見られた。クラス全体をよくするには、ひとりひとりを大切に見つめ、育てていかなければならない。

5 絵本から、いろいろな世界が広がる楽しさを知った。

――「はじめてのキャンプ」という一冊の絵本から、いろいろなイメージをふくらませ、心おどらせて、遊びを創り上げていった子どもたち。図鑑や絵本を通して、恐竜の世界から魚やおばけの世界にひきこまれていったA。絵本の中には素晴しい魅力がたくさんつまっている。その事に改めて感動し、これからも子どもたちと絵本との出合いを大切にしていきたいと思う。

Ⅳ．ノンタンシリーズと３歳児

―オペレッタに向かって―

①あー君のプロフィール

兄もその関係の２～３人の子とわずかにかかわって遊ぶぐらいで、クラス内ではほとんど話しをすることのなかったあー君。

はじめて行なうことに対して抵抗があり、製作など全員が終ってからはじめたりし

ていた。名前を呼んでも、ほとんど返事が聞きとれない。表情がなく何を考えているかわからないあー君。

もっと笑ってほしい。大きな声で話してほしい。はずむ気持ち、心をもって登園してほしい。

②先生、これ読んで……

3才児の一学期は何かとおちつかない学期である。泣いている子。何をしていいかわからず壁にくっついている子。そんな時、子どもたちを集めて本の読み聞かせをよく行なった。〝のんたんシリーズ〟は子どもたちにとても人気があり、興味を示した作品であった。

5月のある日、はじめてあー君が「先生ーこれ読んで。」と〝のんたん　おねしょでしょん〟の本をオズオズとさしだした。

その後、時々本をもってきて「読んで。」と言うようになった。

③ノンタンごっこっておもしろいね……

ままごとの中にも〝ノンタン〟がでてくる位、ノンタンの絵本がクラス内に親しまれるようになった10月。ノンタンごっこを主活動にとりいれてみた。はじめは本の内容に沿った遊びだったが、次第に〝ピクニックごっこ〟〝まほう使いごっこ〟と、いろいろに発展していった。その中であー君も楽しそうに動きまわっていた。「ぼくタヌキ。」と自分のやりたい役をはっきり言っていた。

④ここまで来てみろ！

〝ノンタンごっこ〟の中に意図的に走りまわったり、おいかけたりする場面を多くした。子どもたちは「キャーキャー。」と逃げまわっていた。あー君もおいかけられると、すばしっこく逃げまわり、実際大きな声で「ここまで来てみろ！」と言った。「みんなであー君をおいかけよう。」と言ってみんなでおいかけまわした。あー君はとても嬉しそうに走りまわっていた。

⑤ノンタンの歌を作ろうか……

子どもたちが楽しんでいる〝ノンタンごっこ〟をそのままオペレッタにすることにした。「先生が明日までに曲を作ってくるからね。」と言っておくと次の日「作ってきた？」と聞く子が多かった。短かく単純な曲であった為に、割合早く覚えて歌ってい

た。あー君は、それまでは歌に対して消極的でつまらなそうにしていることが多かった。このオペレッタの練習の時も、最初のころはあまり歌わなかった。しかし家では自分の役を話したり、歌をうたって聞かせたりしていたという。

園でも次第に、まっすぐ前を向き、大きな口で歌うようになってきた。「あー君楽しそうだね。」と言うと恥しそうに、それでもはっきり「うん。」と言ってうなずく。

⑥お母さん、よく見ていてね！

発表会当日。「お母さん、ぼくのところよーく見ていてね。」とはりきって家をでてきたあー君。少し恥しがりながらも、ステージの上から客席のほうをしっかり見つめ堂々と演じていた。しっかり役になりきり、自分の役を楽しんでいる様子がうかがえた。

家に帰り「お母さん見てた？」「ぼくの声聞こえた？」と話したのこと。

⑦その後のあー君

年少の三学期。明るい表情が多く、友だちと走りまわる姿が多く見うけられるようになった。困ったことがあってもはっきり言ってこられるようになった。

年中になり行動もおちつき、大きくなったような感じをうけた。友だちの中にも自分のほうから入っていけるようになったが、あまり会話は多くない。

夏休みあけ、少々精神的に不安定になり、朝になると具合が悪くなることが度々あった。家でよく遊ぶ子がしばらく休んでいること。夏休み中、家中の目が兄のほうにそそがれていたこと……等いろいろ原因が考えられるがはっきりとはわからない。

しかしその後は、とっても明るく活発になり、友だちとよく遊び生き生きとしている。

⑧あー君をみつめて

一年と半年あー君をみつめ、子どもの心は繊細であり、またちょっとしたきっかけで大きく動きはじめることに改めて気がついた。あー君のようにパーッと心の中を表現したり行動することが苦手な子に対し〝本を読んであげる〟という行為は一種の安心感をあたえるてだてであった。

はじめは〝聞く〟という受身的立場であった彼が、絵本の内容に関する会話などから、しだいに能動的になっていった。

自分の心とひびきあう。そんな本と出合い、そこからまた遊びが広がっていく。今までだすことができなかった自分の内側を示すようになってくる。

そんな過程をみつめ、少なからず感動を覚えた。

（本学附属幼稚園）